

E・T・A・ホフマンと自動人形

鈴木 潔

E・T・A・ホフマンは1814年に『アウトマーテ』という小説¹を書きました。アウトマーテとは自動人形（からくり人形）のことで、17、18世紀にヨーロッパで多く作られ、最初は王侯貴族の宮殿・邸宅で飾られていたのが次第に一般の人々が見料を払う展示物になり、見本市や縁日の見世物ともなり、つまり大衆的な娯楽になっていったのです。ホフマンはもともと人形の類が好きで、錫の兵隊、くるみ割り人形、それにマリオネットなどを多く手元に持っていたようです。また、いろいろな機会にからくり人形を見ています。² その経験を元にして『アウトマーテ』という作品は書かれています。

初めに、この物語の梗概を紹介しておきましょう。

ある町で「喋るトルコ人 *der redende Türke*」という人形が大評判になります。どんな人形かと言うと、大きさはほぼ等身大で、縁日の見世物で見るとなガラクタとは違って立派な作りです。趣味の良いトルコ風の衣装をまとい、低い三脚の椅子に座っています。ことに頭部が良くできていて像全体に生命感を与えています。そして、この人形はお告げをするのです。ご託宣を頂きたいと望む見物人は、人形のすぐ傍まで近づくことが許されます。近寄って人形の右耳に向かってものを尋ねると、目をくりくりとまわしたのち質問者の方を向いて、人形の口から息が漏れて答えが返ってくる。そっけない返答もあるし、また軽口を交えたり気の利いた言葉であったりします。ドイツ語で質問されているのに、外国語で答えることもあります。話すとき、右手を挙げたり振ったりもします。幾度か答えを喋ると、人形使いが左わき腹にカギを差し込みガリガリとねじを巻くのですが、そのさい希望者には人形内部の精巧な装置を覗かせます。中には歯車がぎっしり詰まっていてどんな小

柄な人間でも身を潜める余地は無さそう。人形使いが人形から離れて見物人と談笑していることもあり、詮索好きの者たちが人形を触っても平気な様子です。人形が息をするのはどこかにバルブが隠されているのだとか、あの声は人形使いが腹話術を使っているのだとかの説をなす者がいますが、とても正鵠を射ているとは思えない。とまあ、こんな人形でした。

さて、ルートヴィヒとフェルディナントという二人の友人がこの物語の主役です。ルートヴィヒには「子供のころ蠟人形館³に連れて行かれたことがあるが、泣きながら逃げ帰った」という経験がありました。その折に見た陳列品は、歴代の権力者、名高い勇士あるいは殺人鬼や凶悪犯などで、不気味で醜悪、おどろおどろしいので、見物人はみな声を潜めて話していた、などとその折に受けた印象を披露します。

フェルディナントは、蠟人形の類についてはルートヴィヒの意見に賛成だが、自動人形に関しては、それを拵えた作者の技術に目を向けるべきで、これまで見た中ではエンスレン⁴の曲馬師が最も完成されていて、綱渡りもする、その他どんな動作をしても仕草におかしみがあった。しかしいま評判になっている「喋るトルコ人」はいささか事情が違って、質問者の心の奥深いところ、未知の領域を覗く霊視者のようだという噂だから、ちょっと見に行こうではないか、と友人を誘うのでした。

二人は仲間と共に検分に出かけます。人形が展示してあるのはホテルのさして広くない一室、柵をめぐらせた中です。その日、人形はご機嫌斜めのように、みな質問にまともな言葉が返ってこなかったのですが、最後にフェルディナントが試みたとき、彼の顔面が一瞬蒼白となり、再度質問をして返事を貰う様子がルートヴィヒの目によく見えました。

以上が物語の発端です。

さて、顔色が変わるほどにフェルディナントを動揺させたのは何だったのでしょうか。何年前のこと、D市の宿で泊まった夜に、彼は夢うつつの中、隣室で低くピアノの響きがしてその妙なる和音に心を捉えられます。次いでイタリア語で歌う女性の歌声が聞こえてきました。その高く低く歌う水晶の響き⁵のような調べが「無限の憧憬の悲痛が胸を痙攣させるがごとく締め付

けて[……]名状しがたい官能の悦楽」⁶を感じさせました。歌声が響きやむと、溢れる涙を止めることができませんでした。——夢のなかで、若く美しい女性が彼の部屋にはいつてくる。それは今の歌い手で、「私のことがお分かりになったでしょう。あなたの心の中で生きるためにだけ、歌うことが許されているのです」⁷と言います。それは少年時から胸に秘めている恋人、心ならずも引き裂かれた恋人でした。——目覚めた時には思い出の少女と夢の中の歌手とが結びきませんでした。宿の前で話し声がするので窓から見下ろすと、ちょうど郵便馬車が出るところ。男が「準備ができた。出発するぞ」と声を上げます。すぐ傍に女性がいることに彼は気づきますが、帽子を目深にかぶった女性は部屋を出てゆきます。彼女が玄関を出て馬車に乗り込むさい振り向いてこちらを見上げたのですが、それはなんと夢の中の歌手だったのです。フェルディナントは「水晶のような響きの光線で灼熱した短剣に一突きされたごとく [……] 無上の歓喜に体が硬直」⁸するのを感じました。彼はその後、忘れえぬ夢の女性の肖像を細密画に描いてペンダントにし、肌身離さず持ち歩くようになっていたのです。

このことは誰にも話したことがなかったのですが、彼はトルコ人形に近付いたとき、D市での出来事を思い出しながら「私はかつて最高の幸福に浸ったことがあります、そのときと同じ瞬間を、これから先に経験できるでしょうか」と尋ねたのです。すると人形は、「お前の胸のうちを見ているが、鏡のように光る黄金が邪魔をする。その絵を裏返せ」と言う。愕然とし胸に下げていた肖像画をこっそり裏返して再度質問すると、人形は「次にまみえることがあれば、その瞬間彼女を失う」と告げたのです。

フェルディナントは愕然とさせられました。人形が言葉を喋るだけでも不思議なのに、誰にも話したことの無い心の奥底の秘密に関わることを告げられたのですから当然です。どうしてそんなことが起こったのかという謎解きは保留し、ここで物語の進行からいったん離れて、『アウトマーテ』に登場するさまざまな人形を見ておきましょう。作中で話題になる人形を通覧すれば、作者ホフマンの時代の自動人形の状況を伺うことができます。17世紀に盛んになった自動人形は、18世紀には大勢の観客を集める見世物になってい

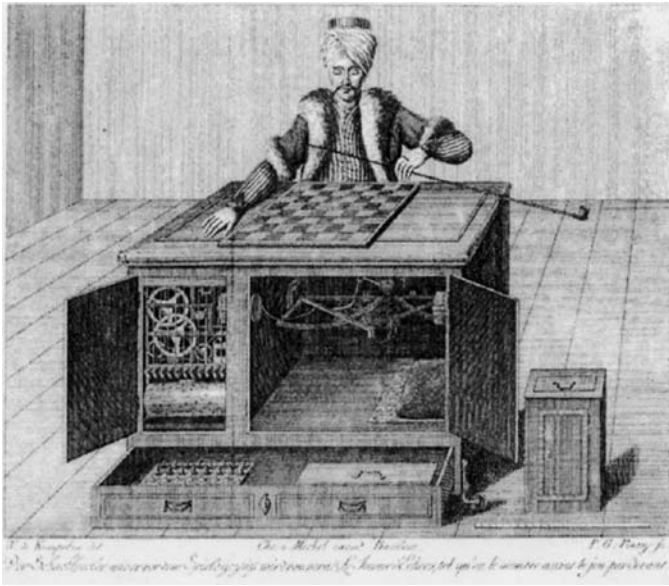
て、さらには交霊術やさまざまなイカサマと組み合わせられ、またラテルナ・マジカなどとあわせて大掛かりなイリュージョン⁹として人気の興行となっていました。

まず「喋るトルコ人」ですが、これは明らかにメルツェル¹⁰の「チェス人形」がヒントになっています。もともと1769年にケンペレン¹¹が、皇后マリア・テレジアを慰めるために作ったとされていますが、通称「トルコ人」と呼ばれるこの人形は人間とチェスの対戦をする人形【図版1】です。ウィーン、パリ、ドレーズデンなどで数多く対局し「考える機械」として大評判になりました。人々はこの人形に驚き、不思議がり、あるいは憶測による暴露本が何種類も出版されます。彼の死後、1804年に宮廷音楽家ヨーハン・メルツェルの所有となります。彼がこの人形を携え1818年からヨーロッパを興行し、1826年にはアメリカへも渡って10年以上も興行を続けました。エドガー・アラン・ポーがこの人形のからくりを推理した¹²ことは有名です。

『アウトマーテ』のトルコ人はチェスを指すのではなく言葉を「喋る」のですが、ケンペレンは「話す機械」というものも作っています¹³。この二つが合わさってホフマンの「喋るトルコ人」になったのでしょうか。ホフマンがケンペレンの人形を直接見たかどうかは不明ですが、彼が愛読したヴィーグレプの著書¹⁴を通じて詳しく知っていました。

ちなみに『砂男』の自動人形オリンピアが発する言葉は「アッハ、アッハ」だけですが、ピアノを弾き、歌い、またダンスもできます。このモデルにはジャケ＝ドロ¹⁵の人形も含まれているかもしれません。その有名な「オルガンを弾く貴婦人」【図版2】か、あるいはオリジナルでないまでも類似の人形をホフマンが見たことは確かなようです。

ホフマンは1801年にダンチヒの武器庫¹⁶で自動人形の展示を見ました。それがここではルートヴィヒの体験として描かれています。相当大掛かりな仕掛けで、中央に戦争の神マルスが廷臣を従えて立っています。周りを囲む鼓手隊がドラムを叩き始め、管楽隊がそれに合わせて音を出し、騒々しい音響がしばらく続いて止むと、廷臣たちが首をまわし槍の柄をドンと床に突く、



【図版1】 ケンペレン：トルコ人のチェス指し
Windischの「解説本」挿絵（1787年）
（Wikipediaより）



【図版2】 ジャケ=ドロ：オルガン奏者
（Wikipediaより）

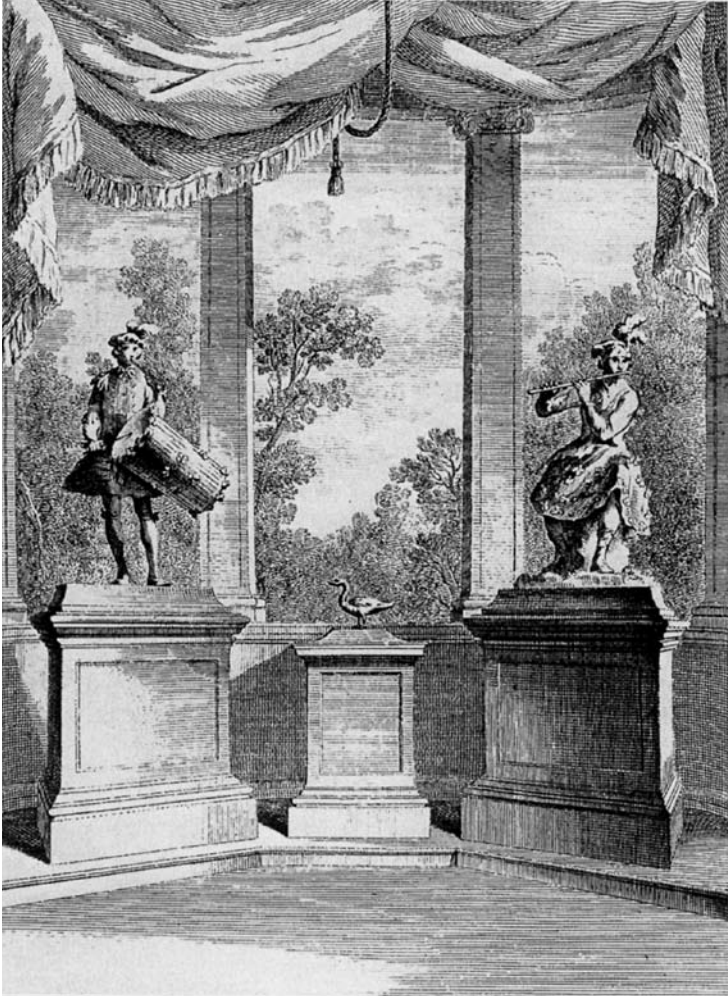
マルスが目をぐりぐりまわして床に下りまた玉座に戻り、再び音楽が鳴って動きが止まるというものです。

『アウトマテ』にはフルートを持つ人形も登場します。フェルディナントが「あれはヴォーカンソンの人形だ」と言うように、確かにかの有名な自動人形「フルート吹き」を髻髷とさせる描写であります。ヴォーカンソン¹⁷は1727年、まだ若い修道僧時代に、料理を食卓に並べ食後片付ける人形を作ったそうですが、修道院を出て、パリとルーアンで解剖学・医学を学びながら、火と水を動力にした「動く動物」を作りました。その後パリで、この有名なフルートを吹く自動人形を作ったのです。当時の機械の常識を越えた高度に技術的な人形は1738年2月、パリのホテルのショールームで一般公開されました。入場料は3リーブル、普通の労働者一週間分の賃金に当たる額だそうです。4月には一日平均75人の客があったといいますから、興行としては大成功でしょう。人形の本体は木製、167センチの身長。12曲の演奏が出来ました。

人気の展示でしたが、客足が落ちてきた1739年、さらに二つの人形を追加しました。笛と太鼓を演奏する人形とアヒル【図版3】です。ヴォーカンソンといえばこの三体が有名です。アヒルは一枚の翼だけで400以上の部品で出来ていて、ガーガー鳴き、水を飲み、えさを食べ、足で立ち上がり、フン(糞)をするというものです。

その後、絹織物の機械改良で多忙になった彼は人形をリヨンで売却します。かくて1741年以降、三体の人形は製作者の手を離れ、見世物としてヨーロッパ各地を巡ることになります。ヴォーカンソンの人形が辿った数奇な運命を少し見ておきましょう。

人形を買い取った商人はデユムーラン¹⁸という名前でしたが、彼は人形を携え、英国、オランダをまわりフランスに戻り、さらにドイツへ足を伸ばします。十数年に亘り見世物として稼いだあと、1754年になって売却を図るのですがうまくいかず、これを担保に借金してペテルブルク、モスクワに赴き、自動人形以外の品々で展示会を催す。機械職人として一時モスクワ大学に雇



【図版3】 ヴォーカンソン：ドラマー、アヒル、フルート奏者
18世紀に出版された書物の挿絵（Gaby Woodによる）

われますが、1781年ペテルブルクで死亡し、人形は彼に資金を融資した商人の所有となったのです。

プロイセン啓蒙主義の大立者、フリードリヒ・ニコライが1781年にニュルンベルクで担保となったままの人形を目撃して、有名な旅行記¹⁹に記録しています。

人形はデューランがニュルンベルクを発つ前に木箱に納められ、資金を用立てたプリューガーの店に置かれていました。人形は木箱に入れられているが、ふたを開けて中を見ることができ、ニコライは内部のメカニズムを眺めて、アヒルの飲み込んだ餌が消化されて出てくるのではなく、フンに見えるものが予め用意してあって、機械の働きで排出される仕組みになっていることを観察しています。

そしてニコライは、二十八年間の囚われの身から人形が解放されることが望まれる、どこかの司教か君主がこれを買取ってくれることを希望する。これは君主か裕福な個人だけに望まれる。というのはこれで一儲けを企む者はきちんと修復するだけの費用をかけないだろう。メカニズムに錆が来ているかも知れず、皮革部分も木部もいろいろ問題があるし、1738年にフランスで演奏された曲が今でも一般受けするかどうか疑問だ。私のこの文がいくらかでも宣伝になれば嬉しいのだが、と結んでいます。

この人形は1785年にヘルムシュテット大学の哲学・医学教授G・C・バイライス²⁰の手に渡ることになります。『アウトマーテ』の作中にX教授（+その友人の顧問官B）として登場する人物のモデルと思われます。ここで小説のストーリーに戻ってみましょう。

ルートヴィヒとフェルディナントは、あのトルコ人形はもともと単なる見世物に過ぎなかったもので、それに手を加えて不思議な能力を与えたのは自動人形に詳しいX教授であったという情報を耳にします。そこで二人はX教授を自宅を訪ねます。邸内に招じ入れられると、広間の中央に大きなフリーゲル、右にフルートを持つ男の人形、左にはクラヴィーア風の楽器を前に座る女性の人形がありました。二体の背後にドラムを持った少年と、トリアングルを持った少年。その他オルケストリオンといくつものオルゴール時計

があります。教授がフリュエゲルを演奏すると人形がそれに加わってきて、ついにはオルケストリオンとオルゴール時計もにぎやかに鳴り出す・・・というわけです。問題の「フルート吹き」が出ています。そのほか、ジャケ＝ドロ風の人形やら、実態が良く分からない自動演奏機械²¹が描かれています。

ここにX教授として登場しているバイライスはホフマン同様ヴィーグレプの著書を熱心に読んだらしい。同書の第1巻にヴォーカンソン人形の記述があるということです。彼は大学の講義で使うため、庭園つき豪邸に楽器、機械、珍品を多数収集していました。ですが、自動人形をきちんと維持することは出来なかった模様です。

というのも、1805年8月、56歳の文豪ゲーテがバイライスの邸宅を訪問していて、ゲーテの書き残した文書²²によると、所蔵品の多くはたいへん嘆かわしい状態で、「ヴォーカンソン自動人形は全く動かなくなっていた。フルート吹きは庭の古い東屋にみすばらしい服をまとめて置かれていた。もはやフルートを吹かず、バイライスは元々のシリンダーを出してくれたが、最初の単純な小曲もまともに動かなかった。二つ目のシリンダー、それは寄宿していた数人のオルガン技術者に長年にわたり修理させたものの、完成することも据付けもできなかった。それでフルート吹きは初めから沈黙のままなのである。アヒルは羽根がもげて骸骨になっていた。餌はしっかりついばむが、もう消化することは無い」²³と記されているからです。

翌年、ロマン派の詩人、アヒム・フォン・アルニムもバイライスを訪ね、そのときの模様を『ドロレス伯爵夫人』中の1シーン²⁴に描いています。

さて『アウトマーテ』に戻ります。ルートヴィヒとフェルディナントは様々な自動人形による自動楽器の演奏を聴いたあと、X教授宅を早々に辞して帰るのですが、道すがら二人は機械と音楽の関係について意見を述べ合います。音楽が人間の心を強く掴み、心に名状しがたい感情を引き起こすのは、楽器を操る指や呼吸のテクニックではなく魂の動きだ。魂が技を通じて人間の内面に相似の響きを掻き立てるのだから、機械製作者が人間の器官を模倣して音楽を演奏させても、音楽の本質を損なうだけのものだ。フェルディナント

は、幼いころ家にハーブ時計²⁵があって1時間ごとに曲を奏でるが、この機械音楽の硬直したところが不愉快だったと述懐します。

そんな話をしながら歩いていると、郊外のとある庭園の近くで突如二人の耳に聞きなれない響きが聞こえてきます。それはハルモーニカ²⁶の音に似た音色になり、そして女性の声になり、フェルディナントが夢の中で聞いたあのイタリア語の歌が聞こえてきたのです。すると庭園にX教授の姿が見えます。そこは教授の実験室だったのです。教授が庭園の歩道を行ったり来たりすると、回りのもの一切が生き生きと活発になり、灌木の茂み、樹木の葉むらに水晶のような透明な音や響きがきらきらし始め、合流してひとつの流れとなります。火炎が空中を吹き抜け心の奥深くに迫り、彼岸世界を予感させる無上の歓喜の火をつけるのでした。

ここに至って、フェルディナントとあの歌手との神秘的な心霊関係(Rapport)²⁷に教授が干渉しているのではないか、あるいは彼の意思に反して干渉せざるを得なくなっているのではないかとルートヴィヒは推測します。そこで二人は翌日にもX教授に会って謎の解明に迫ってみようという取り決めをしました。しかしその日、火急の用でフェルディナントはB市に呼び戻されることとなったのです。

このように『アウトマーテ』の物語は、当時これもまた世間の注目を浴びていた動物磁気(磁気治療、催眠術)による魂と魂との不思議な触れ合い、精神の交感というテーマに進んでいきます。フランツ・アントン・メスマー²⁸から始まり、広くヨーロッパに普及した磁気療法。これにはホフマンも強い関心を持っていました。『アウトマーテ』を書く前年に『磁気療法師』(1813)という、このテーマを直接扱った作品を発表しています。彼がもっとも注目したのは神秘的な心霊関係(ラポール)が成立すると、心の奥底の思いが別人の心に伝わるというところです。フェルディナントは、トルコ人形があこの秘密の出来事に触れたのは、人形制作者の何らかの手立てで、未知の世界を覗く霊視者が人形を通じて謎の交信を送っているのではないか、という考えを披露します。まさに動物磁気説です。トルコ人形のお告げに耳を傾けていたおりに、実はあのイタリア語の歌が聞こえていた気がしたとフェルディナ

ントが打ち明けたとき、ルートヴィヒの方も、柵に手をかけていたのだがその手にどよめき、音楽のようなものを感じた、と言います。これはメスマーの「不可視の流体」とか有名な「バケ」を思わせる描写²⁹です。

ホフマンの場合、自動人形は現世の存在の対として扱われていると言えます。『砂男』ではクララ対オリンピアという組み合わせで市民社会の娘とこの世を越えた存在の対比がはっきりしています。ホフマンにあって人形はより高い世界の存在とされますが、こうして現実界と対にされる存在は必ずしも人形に限りません。『黄金の壺』では青い目のヴェローニカと「水晶の鈴のような響き」を奏でるヘビのゼルペンティーナという対比があります。人形とヘビという違いはあっても『砂男』と同じ構図です。主人公の大学生アンゼルスはこの両者に引き裂かれ、ついにヴェローニカは別の男と結婚します。『アウトマーテ』では初めに夢うつつの状態で現れ、次いで人形を通じて現れてくる「歌手」と、フェルディナントの昔の恋人とのペアとなっています。ただしアウトマーテ、自動人形という言葉そのものは二義的に使われています。『砂男』のある場面³⁰ではクララは”Du lebloses, verdammtes Automat!”とナターナエルに罵られます。つまり「この虚ろな呪われた木偶坊め」ということで、生命の無い人形という意味でも使われるのです。

ここにロマン派の「機械」に対するアンビヴァレントな態度を読み取ることが出来ます。ロマン派の詩人たちはそもそも機械的自然観に反撥して有機的な世界像を主張していました。そうでありながら、ホフマンに限らず多くのロマン派の詩人たちがメカニックな技術の精華たる自動人形になぜ惹かれたのでしょうか。ホフマンの場合、楽器の技術的な進歩に期待するところもあったようです。彼はこの世のものでない霊妙不可思議な楽の音が、特別な場合には聞き取れるものと信じています。エオリアンハーブへの関心を示しているのも、この世界にあって自然の神聖な音楽に近付こうとする態度の表れであろうし、新しい楽器がそれに寄与するかもしれないと考えていたと思われる。

それにまた、精密な機械が精妙な動きで生き物の動作を真似るとき、誰しも技術の見事さに感嘆すると同時にどうしても不気味な感じを抱かざるを得

ません。ホフマンの場合、この不気味さは小説の技法として用いられていて、『砂男』ではそれが見事に効果を發揮しています。しかも単に読者をひきつける技法であるというに留まらず、それは彼の世界像の表現に繋がっているのです。

『アウトマーテ』の作中にも直接言及³¹されていますが、この作品を執筆していたころ、ホフマンはG・H・シューベルトの『自然科学の夜の側面についての見解』という本³²に熱中していました。同書によれば、いにしへの人類の無垢なる幼年時代、人間は「自然との聖なる調和のうちに」自足して生きていた。ところが次第に人間は母なる自然のふところを去り、「より神的な理想を」追ってゆく。そうなると人間はもはや自然を理解しなくなるのである。従って現在の人間は、未来の個と全体が生き生きとした調和を回復する世界、すなわち神の理想を憧れもとめて生きているのである。シューベルトはこの中間としての現代、その内に潜んでいる「未来の生の萌芽」の存在を主張し、夢や催眠(夢遊病)の中にそれが垣間見えると言うのです。(フェルディナントがああイタリア語で歌う歌手に出会ったのは夢と現のあわいでした)そして動物磁気こそ現代にあって、一時的にせよ人間に未来の世界を開示するもの、「深い共感」³³が透視・予知・精神感应などの超常現象を発現させるものと説いています。『アウトマーテ』の人形はこの超常現象を媒介する存在、依り代として設定されていると考えていいと思います。

さて『アウトマーテ』のストーリーはどうなるのでしょうか。火急の用でB市に急いでいるフェルディナントですが、途中、ある教会で結婚式に遭遇します。ロシアの軍服を着た花婿と簡素な身なりの花嫁ですが、花嫁の方をよく見ると、それは何とあの歌手だったのです。彼女も彼に気づいてその場にくず折れます。フェルディナントは無我夢中で教会を去りました。しばらくの時を経て彼はルートヴィヒに手紙を書き送ります。「果たして私は彼女を失ったことになるのだろうか。胸の奥で燃える生命となって、彼女は永遠に私のものではないだろうか」

ここで物語は終わっています。謎の解明はされないままです。この物語の

語り手テオドールは「初めから断っているように、これはフラグメント（断章）だから、後はそれぞれが好きのように空想を膨らませて欲しい」と言います。結末の無い物語です。私の発表もここで終わらせていただきます。ご清聴有難うございました。

注

* 本稿は2007年3月23日に同志社大学で開催された「ドイツ・デー in Doshisha 2007・考える人とアーティストのコラボレーション」という催しの一つ、「《花・歌・人形》の開かれた文化」研究会主催、日本美術教育学会共催によるシンポジウム「四谷シモン人形作品を巡って」で発表した「E・T・A・ホフマンと自動人形」の原稿を改稿し、注釈を補ったものである。

1 この作品は1814年2月「一般音楽新聞」*Allgemeine Musikalische Zeitung*に部分掲載。同年4月発行の「高雅新聞」*Elegante Zeitung*に全文掲載、のち枠物語「ゼラピオン同人集」*Die Serapions-Brüder*第2巻に収録され、テオドールが語り手となっている。ホフマンと自動人形といえば、『砂男』*Der Sandmann* (1816-17)のオリンピアを思い浮かべるが、『アウトマーテ』はその先触れとなった作品と言えるだろう。

“Automate”をホフマンは複数形（単数は*das Automat*）として用いている。（現在では単数主格は*der Automat*で、男性弱変化名詞である）

2 *AMZ*宛てに原稿を送ったときの手紙の追伸に「この作品の多くの出来事は、以前東プロイセンで住んでいたときの思い出なのです」とある。記録を探ると、ホフマンは1801年晩秋にダンチヒの倉庫（武器庫）で自動人形の展示を、1813年10月にドレーズデンでさまざまな自動音楽機械の展覧を見ている。

人形に限らず、玩具一般についても彼は深い関心を示していて、『くるみ割り人形』*Nußknacker und Mausekönig* (1816)その他の作中でよく取り上げられている。因みにロマン派の先輩作家ルートヴィヒ・ティークの『クリスマス・イヴ』*Weihnacht-Abend* (1835)にも、ベルリンのクリスマス市の様子と商われている玩具の詳しい描写がある。

3 フランス人のマリー・グロショルツ（*Marie Grosholz* 1761-1850）の蠟人形が評判になっていた。マリーの母は、解剖図の模型作りを得意とする医師 *Curtius* の元で家政婦の仕事を得ており、マリーはこの医師から蠟細工の手ほどきを受けた。そして、当時の有名人（ヴォルテールやB・フランクリンなど）の蠟人形を制作し、

名声を得るようになった。その才能を見込まれ、ルイ16世の妹・エリザベート内親王の美術講師となり、ルイ16世一家の蝋人形制作を手がけるなどして宮廷に出仕することになった。

革命後、自動人形と同じく、マリーの蝋人形はやはり展示物、見世物として大衆の娯楽となっていた。1795年にフランス人技師Francis Tussaudと結婚、二人の男子を儲けるが、1809年に離婚。1835年、ロンドンに「マダム・タッソー Madame Tussaudの蝋人形館」を開館した。

- 4 エンスレン J.C. Enslin (ca.1782-1866) はベルリン芸術アカデミー教授。自動人形を作ってベルリンのフランス通りで展示した。その中に綱渡り人形もあった。

幻灯機を用いる大掛かりな「ファンタスマゴリー」は18世紀末、ベルギー人口ペールソンが始めたとされる。彼はまた「見えない少女」という奇術でも評判をとった。天井から吊るされた箱（箱には覗き穴があって中が空だとわかる）から突き出た伝声管に見物人が相談事を話すと若い女の声で返事が返ってくる。この奇術は評判になったようで同様のモチーフは『牡猫ムルの人生観』第2巻第4章にも「ガラス球の中の見えない少女」として出現する。

- 5 「水晶のような音の光線」ホフマン独特の、光と音の共感覚的表現。

「夜のしじまの中の光明、光明は音だった・・・その音はきらきら輝きながら和音になる、メロディーの本流が溢れる」『騎士グルック』 Ritter Gluck, 1809

「ところがその瞬間に彼の頭の上で、澄んだ水晶の鈴の三和音にも似た音が響いた。見上げると、金緑色に輝く蛇が三匹、枝に体をまきつけて、小さな頭を夕日に向かってさしのべている。するとまたさっきと同じ囁きが聞こえ、蛇たちは葉むらや小枝をすりすりりとくぐり上がり、這いおり、そのすばやい動きのために、まるでニワトコの茂みがその暗い葉むらに幾千ものきらめくエメラルドをまき散らしているかに見えた」『黄金の壺』 Der goldene Topf, 1814

- 6 Die Serapions-Brüder, S.335

- 7 Die Serapions-Brüder, S.336

- 8 Die Serapions-Brüder, S.336

- 9 やがて近代奇術の父、ロベール＝ウーダン Jean Eugène Robert-Houdin (1805-71) の活躍が始まる。彼も元は時計職人、精巧な自動人形も作ったと言われる。

- 10 メルツェル Johann Nepomuk Mälzel (1772-1838) はウィーンの機械技師、メトロノームを発明したことで知られる。「パンハルモニコン」というオーケストラ自動演奏楽器に演奏させるために、対ナポレオン戦勝の祝賀作品をベートーヴェンに委嘱。この機縁からベートーヴェンは楽曲のテンポ指示にメトロノーム表示を採用するようになった。メルツェルは補聴器を作って楽聖に提供した、とも言われる。

- 11 ケンペレン Wolfgang von Kempelen (1734-1804) はハンガリーの技術者、チェス人形はオーストリア皇帝マリア・テレジアを慰めるために作られた。『牡猫ムルの

人形観』にもケンペレンの『将棋指し』人形として取り上げられている。

12 エドガー・アラン・ポーが『メルツェルの将棋指し』Maelzel's Chess-Player(1836)で、そのからくりを推理している。この人形はその後、保存されていた美術館の火事で1854年焼失した。

13 話す人形にも長い歴史がある。18世紀には Abbe Mical 「しゃべる人頭」 talking heads というのがあって、フランス語を明瞭に話したという。1778年、科学アカデミーに提出された。

14 ヴィーグレブ Johann Christian Wiegleb (1732-1800) は自然研究家、とりわけ化学、薬学を研究。薬剤師、薬局を開業。多くの弟子を育て、著作を著した。

ホフマンの日記、1803年10月2日「夜はずっと気ままにWiegleb の魔法本を読んだ。いつか、もしいい時代が来れば、有益で立派に役立つ自動機械を作りたいと思いついた - Quod deus bene vertat!」

Joh. Nic. Nartius, Unterricht in der natürlichen Magie oder zu allerhand belustigenden und nützlichen Kunststücken; völlig umgearbeitet von Johann Christian Wiegleb. Berlin und Stettin 1779.

この書物にヴォーカンソンの人形のメカニズムに関する解説が抜粋されて載っていると、F.Nicolai, S.282 にも記されている。

15 ジャケ＝ドロ Pierre Jaquet-Droz (1721-1790), Henri-Louis (1752-1791) はスイスの時計職人。父子で人形を製作した。「オルガンを弾く貴婦人」や文字を書く人形、絵を描く人形が有名。

16 ダンチヒの武器庫、注 2 参照。

17 ヴォーカンソン Jacques de Vaucanson(1709-1782) の三体の人形が作られ、そしてその後には辿った経緯は主として、Gaby Wood: Living Dolls. に拠る。

18 デュムーラン、G.WoodはDumoulinと綴り、ニコライはDü Moulinと綴っている。

19 フリードリヒ・ニコライ『1781年ドイツ・スイス旅行記』（第一巻11節）参照。これは文化史的に貴重な記録である。ニュルンベルクでの見聞として、以下の記述がある。

「人形はどういう成り行きによってか、デュムーランなる人物の所有となった。もともと金細工師で同時に機械技師でもあった。この男は人形を見世物としてドイツに持ち込んだ。そうこうして1752年か53年にニュルンベルクにやってきた。この人形を手放そうと、1754年パイロイト辺境伯に売却を持ちかけた。この取引はさまざまな交渉を重ねたものの成立しなかった。すでに負債を背負っていたデュムーランは1755年にサント・ペテルスブルクに旅立った。モスクワなら人形を売却できると考えたからである。だが売れなかった。結局そのままモスクワで機械技師として働き、1765年ころそこで亡くなった。

「人形は彼がニュルンベルクを発つ前に木箱に納められ、プリューガー Pflüger の店に預けられたが、この店はすでに彼のために多額の立替をしていた。人形を保

管するためにも費用がかかっていた。プリューガーの店はデムーランの死後、この人形の所有権を得ていた。店はこれを利用する気も無く利用することもできず、誰でも買ってくれるならこの立替分の金額、3000フローリンで売却すると言っている。

「今述べたように、人形は床に置かれ木箱に入れられているが、ふたを開けて中を見ることができる。外から見る限り保存状態は良いようだ。内部のメカニズムはアヒルが一番良く見える。特に、餌を飲み込む仕組みが巧みに作られている。これはずっと下の方にしつらえられたフィゴの働きである。フィゴは管で喉につながっていて、空気を喉に吸い込むと餌がくちばしの中に飲み込まれ、外部の空気で押し込まれる。しかしメカニズムから見て取れるが、餌はアヒルの体内の奥まで入るのではない・・・餌は飲み込まれた管に入るだけ・・・アヒルの尻に消化された餌に見えるものが用意してあって、機械の働きで適当な時間に排出されるのである」

- 20 バイライス Gottfried Christoph Beireis (1730-1809) はヘルムシュテット大学医学部の教授。化学者でもあって優れた品質の染料を発明し財を成したと言われている。ヴォーカンソンの人形は1785年にオークションで入手したらしい。
- 21 自動演奏機械、当時メルツェルやカウフマンを初めとして、多くの人によりさまざまな自動楽器が作られた。フランスのオートマタと自動楽器の歴史に関して竹下節子『からくり人形の夢』が参考になる。
- 22 ゲーテの書き残した文書：『アナル』 Annalen 1805 と書簡An Charlotte von Stein (12.08.1805), An den Herzog Carl August (28.08.1805)などで、すでに75歳の高齢ながら元気旺盛なバイライス博士を訪問した顛末が語られている。
- 23 Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche Bd.11, S.761ff.
- 24 『ドロレス伯爵夫人』 Achim von Arnim: Armut, Reichthum, Schuld und Buße der Gräfin Dolores (1810)の第9章「驚異の博士、見えない少女とフルート吹き。レナルドとディヴィーナ」で「かの有名な博士」を訪ねた顛末が面白おかしく描かれている。
- 25 ハープ時計Harfenuhrとは、楽器ハープが仕込まれた振子時計で、カウフマン Johann Gottfried Kaufmann が息子Friedrichと共に製作したものらしい。彼は1812年9月に、自動音楽機械で序曲やコンツェルトを演奏した。作曲家ウエーバーもカウフマンの音楽機械について論じている。C.M.v.Weber: Der Trompeter, eine Maschine von der Erfindung des Mechanicus, Hrn. Friedrich Kaufmann, in Dresden (AMZ vom 7.Okt.1812)
- 26 ハルモーニカ、現在の「ハーモニカ」とは全く異なるもの。ガラスの棒、あるいはガラスの鈴を響かせる楽器。
- 27 心霊関係、ラポール (Rapport) : ホフマンの身近にはメスメリズムに打ち込んでいたダーフィット・フェルディナント・コーレフ博士という医師がいて、「ゼラ

ピオン同人」の一人であった。また、C.A.F. Kluge: Versuch einer Darstellung des animalischen Magnetismus als Heilmittel, Berlin 1811. などの書物を通じて、磁気治療の知識を得ていた。クルーゲは『廃屋』Das öde Haus (1817) にもG.H. シューベルトと並んで名前が挙げられている。

28 フランツ・アントン・メスマー Franz Anton Mesmer (1734-1815)

29 マリー・アントワネットの「首飾り事件」を題材としたアレクサンドル・デュマ『王妃の首飾り』などでメスマーの磁気治療の様子が描かれている。

30 Fantasie- und Nachtstücke, S.348

31 Die Serapions-Brüder, S.349

32 Gotthilf Heinrich Schubert (1780-1860) 『自然科学の夜の側面についての見解』Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft (1808) である。これと『夢の象徴論』Die Symbolik des Traumes (1814) によってシューベルトはロマン派の詩人たちに計り知れぬ影響を及ぼした。ホフマンの受けた影響は決定的で E. Buschによれば「ホフマンの作品はシューベルト哲学の芸術的インタープリテーションと呼びうる」“E. Th. A. Hoffmann ist ohne Schubert nicht zu denken. Seine Dichtung kann eine künstlerische Interpretation zu Schuberts Philosophie genannt werden.“ (S.310) とすら言われている。

33 シューベルトによれば「自然とのいにしへの紐帯」を失った人間は、未来のより高い世界、個と全体が再び生き生きとした調和を回復する世界、すなわち神の理想を憧れもとめて生きているのが現在の姿である。そして動物磁気こそ現代にあって、一時的にせよ人間に未来の世界を開示するもので、患者と施術者との「深い共感」 tiefe Sympathieが透視・予知・共感などの超常現象を発現させる、と主張している。「深い共感」という表現は「ラポール」を思い起こさせる。

ホフマンは音楽を、ここではG.H. シューベルトに従って、太古の自然の神聖な音楽、霊妙不可思議な楽の音が人間を包んでいた太古の楽音の残響が「天体の音楽」であって、現在の人間にも心に共鳴する霊妙な音・理想の音楽が、催眠状態では聞き取れるものとして捉えている。

「天体の音楽」とは古代から脈々と伝わる音楽観、ここでは「スキピオの夢」が触れられているが(Schubert: Ansichten, S.65)、ギリシャのピュタゴラス以来、宇宙は美しいハーモニーを奏でているという観念が受け継がれてきている。

シューベルトの著書から、不思議なセイロンの「悪魔の声」と呼ばれる自然の音楽についての記述も、同じ個所で引用されている。

[テキスト・参考文献]

- Sämtlich Werke in fünf Bänden, Winkler-Verlag (München 1960-1965)
 (ホフマンのテキストは主としてこの5巻本を用い、適宜他の全集も参照した)
 E.T.A.Hoffmann: *Fantasie- und Nachtstücke*, 1960
 E.T.A.Hoffmann: *Die Elixiere des Teufels. Lebens-Ansichten des Katers Murr*, 1961
 E.T.A.Hoffmann: *Schriften zur Musik. Nachlese*, 1963
 E.T.A.Hoffmann: *Die Serapions-Brüder*, 1963
 E.T.A.Hoffmann: *Späte Werke*, 1965
 Tieck, Ludwig: *Weihnacht-Abend (1835) / Tieck's Schriften Bd.21*, Berlin 1854 (Reprint 1966)
 Johann Wolfgang von Goethe: *Die italienische Reise ; Die Annalen (Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche Bd.11; hrsg. von Ernst Beutler – Artemis, 1950)*
 Johann Wolfgang von Goethe: *Briefe der Jahre 1786-1814 (Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche Bd.19; hrsg. von Ernst Beutler – Artemis, 1949)*
 Ludwig Achim von Arnim: *Sämmtliche Werke Bd. 9 (Buch17, Buch18)* Hildesheim: Olms , 1982
 Nicolai, Friedrich: *Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz im Jahre 1781 / (Reprint) Hildesheim 1994*
 Gotthilf Heinrich Schubert: *Ansichten von der Nachtseite der Naturwissenschaft*, Dresden 1808 / (Reprint) Darmstadt 1967
 E. Busch: *Die Stellung G. H. Schuberts in der dt. Naturmystik und in der Romantik.*
 竹下節子『からくり人形の夢／人間・機械・近代ヨーロッパ』(岩波書店 2001)
 Wood, Gaby: *Living Dolls. A Magical History Of The Quest For Mechanical Live.* London 2002 (Paperback 2003)
 (日本語訳: ゲイビー・ウッド著、関口篤訳『生きている人形』青土社 2004)

E.T.A.Hoffmann and Automata

Kiyoshi SUZUKI

Key words: automata, dolls, mechanical instruments, mesmerism, illusion